一歩の前の物語

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一歩の前の物語

【Ｎコード】
Ｎ８９６４Ｋ

【作者名】
佐和島ゆら

【あらすじ】
お姉ちゃんとお花見にきた妹。雨の日、満開の桜を眺めながらの姉妹の会話する話です。

お姉ちゃんと花見に来た。
高校を卒業して大学に通うために東京に上京してもう二年、四月を迎えたら三年目になる。東京でお姉ちゃんと花見をするのは初めてだった。お互い勉強とかアルバイトとか忙しくて、更にお姉ちゃんは就職活動もしなきゃいけなくて暇がなかった。今年こそと思って、研修のあるお姉ちゃんの三月のスケジュールの合間をぬって何とか花見をしたのだけど。
「全然降り止まない……」生憎の雨だった。
冷たい雨が静かに水の粒を落として、コンクリートの地面に溜まって波紋を広げている。
「まさかここまでとは」
外の寒さに耐えかねて入った喫茶店の席に着くなりお姉ちゃんは小さくつぶやいた。
それから小首をかしげながら私の機嫌を伺う。
「君は大丈夫？　寒いし、かなり天気が悪いけど」
「大丈夫だよ。これくらい」
「そっか、それなら良かった」
お姉ちゃんは頬を緩ませながら小さく息をついた。
「お姉ちゃんこそどうなの？　こんな天気で、雨にうたれた桜しか見れないけど」
「結構好きかな……雨にうたれて濡れてる桜も。人が少ないからじっくり見れるし」
喫茶店内は外に比べて本当に暖かかった。冷たさで色を失っていたお姉ちゃんの頬がみるみる赤くなる。注文をとりにきたウェイトレスに温かいダージリンと桜色のロールケーキをお姉ちゃんは頼んだ。私もお姉ちゃんと同じケーキと温かいコーヒーを注文した。ウェイトレスは私に砂糖とミルク、お姉ちゃんにはさらにレモンをつける

かどうかと聞いてきた。私は言った。
「ミルクだけで」
「ミルクと砂糖多めに持ってきてください、レモンはいいです、すっぱいから」
思わず子供っぽいと言ってしまいそうになった。しかし言うとお姉ちゃんが落ち込むので、目線をさまよわせて落ち着かない気持ちをなだめる。心を落ち着かしてお姉ちゃんに目を向けると、お姉ちゃんは窓の外で雨にうたれる桜を見て目を細めた。
白や白にほんのりと紅を含んだ色の桜が雨にうたれている。雨がやむ気配はない。しとしととふりつづけている。
この日でなければ今年お姉ちゃんと花見に行く機会がなかったとはいえ、残念と思う自分がいた。確かに雨にうたれている桜を見るのは悪くないけど、項垂れる花を見続けるのは辛い。湿っぽい気分になる。
場をぶち壊しかねないので言えないけど、桜を楽しむのなら晴れた空の下で満開の桜の並木道を歩きたいなと思う。
お姉ちゃんは言った。
「雨に耐え切れなくて花が少し散ってるね」
「そうだねぇ」
私は頷いた。確か今日が今年の桜が満開になった日だったはずだ。もったいないなぁとかすかな声で呟いた。お姉ちゃんは運ばれてきたダージリンに砂糖とミルクを入れて、スプーンでゆっくりと丁寧に混ぜる。
「昔、小学生のころだけど。満開じゃない桜が嫌いだったな。特に葉桜は本当に嫌だった」
「だけどお姉ちゃん、桜餅大好物だよね。葉の端をかじかじするくらい。なのに葉桜嫌いなんだ」
お姉ちゃんは頬をふくらませながら私を軽くにらみつける。
「は、話の腰を折らない。桜の葉はおいしいよ、桜餅限定だけどね！　というかもぉ、食べ物と風情の話を混ぜないでよー」

お姉ちゃんの肩を軽くたたいてなだめながら私は言った。
「ごめん、ごめん。で、何で小学生の頃葉桜が嫌いだったの？」
「何かあやされているような気がするけど。まぁとにかく小学生の頃、葉桜を汚いと思ってたんだ。満開の桜って綺麗じゃない。風で散る様はそれだけでドラマみたいじゃない。完璧じゃない。だけどそんな夢みたいな光景に葉が混じったり、散った花の残骸が地面に転がって茶色になったりして、満開の桜の綺麗な姿が形無しになっちゃって。腹の底を掻くような、微妙に苛立つんだよね」
それからとうとうとお姉ちゃんは昔感じた葉桜のみっともなさを語りだす。
私はミルクを入れたコーヒーを飲んだ。
……相変わらず語ると長いなこの人。

ぼんやりとしながら私は手元のカップの中を見た。コーヒーの水面がかすかに波立つ。ゆるりとたつ煙が鼻をくすぐり、ミルクでやわらかくなった豆の香りに心が安らいだ。
就活しないと……心の中でつぶやいた。
今年で私は大学三年生だ、秋から本格的に就活を始めるつもりでいる。ただでさえ憂鬱な就職活動をさらに気分的に深刻化させているのは、お姉ちゃんの就職活動を見ていたせいだろう。経済的にも精神的にも大変だった。お姉ちゃんの活動を見ているだけでも時間も体力も精神力の浪費の激しさはよく伝わってきた。バイトの時間も減って生活費を稼げなくて、家族に援助を求めなきゃいけない状況になり、お姉ちゃんは苦しそうな顔をしていた。家のお金のなさをお姉ちゃんは実感していたからだろう。
家の大黒柱であるはずのお父さんが仕事を長く続けられる人じゃなかった。愛想と笑顔はいいが、本質的に人の下で働けない。家族を持ってしまったスナフキンみたいな人だった。
だから収入はパートで働くお母さんだけしかない、よくいる貧乏な家族だった。

そんな元からお金のない家では誰かが病気になったりしたら、それだけで生活崩壊するには十分な理由だ。家の場合はお姉ちゃんとお母さんが主に看病したお父さんの病気だった。
二年前に死んだ父さんの病気は脳を圧迫する難しいもので、入院費や治療費、その他もろもろ、生活困窮するには十分なお金がかかった。
だから何でも自前で稼がなきゃいけない状態なのだけど……私は深く息をついた。
アルバイトと勉強と就活の三重苦……どうしのごうか。
「もぉ！」
テーブルに衝撃。カップが揺れて中身がこぼれそうになる。私はあわててカップを押さえると、お姉ちゃんは言った。
「聞いてるの！」
私はあいまいに頷きながらお姉ちゃんを見た。
「き、聞いてる。聞いてる」
「本当？　君が興味のなさそうなことを話したのに？」
お姉ちゃんは疑いのこもった目線を私に向ける。
「聞いてる、聞いてる。葉桜についての話でしょ」
「具体的にはどんな話」
「えーと葉桜が何か汚いって思ってて……」
言葉が詰まった。
後は知らない。耳に入っていない。
お姉ちゃんは深く息をついた。
「聞いてないなら、聞く気がないなら、話を止めて。私は興味のない話を出来るだけしたくないよ。聞かされても困るだけなんて最悪だし……」
お姉ちゃんはしゅんと頭を下げながら言った。
そこまでまじめに考え込まなくてもと思いつつ、私は口をあけた。
「そ、そんな事ないよ。桜超好きだよ、興味がある。えーとお姉ちゃんはどんな桜が好き？　綺麗だと思うの」

「何かフォローくさいよ」
しゅんとしたまま暗い声でお姉ちゃんは言った。
いい人なんだけど、微妙に面倒くさいんだよなと思いながら私はお姉ちゃんをなだめると、やがて少しずつお姉ちゃんの気分はなおっていった。
お姉ちゃんはのんびりとした口調で言った。
「今はね、昔と違って葉桜は好きになったんだ。満開の桜もいいけど、葉桜もいいなって」
「え、何で」
私は思わず聞き返すとお姉ちゃんはえ？　と声を上げて無表情になって、それから慌てて無邪気な笑みを浮かべた。装った。
「次を感じるからかな？　桜も花から葉にきちんと変化するのかって……って何を言ってるんだか」お姉ちゃんは恥ずかしそうに目線を私からそらしながら頬を指でかいた。
お姉ちゃんらしい言葉だと思った。子供の頃から変化が弱いというか、変化が怖くなってしまった人……それがお姉ちゃんだ。
私は軽口をたたいた。傷の具合を見るために。
「桜の下には死体って言うね。桜の花ともどもと栄養になるのかな」
「物騒な事言うね、すくすく死体の肥料で伸びちゃうってどうかしら。でも西行法師あたりなら大喜びかな。あの人自分が望んだ死に方だったし……きっと栄養になって桜と一体化できると思ったら大喜びするかも」
まぁ、自分の望む死に方なんて果てしなく難しいんですけどと、眉をひそめて苦い口調でお姉ちゃんは言った。

――お姉ちゃんは死んだお父さんの最後に傷ついている。死ぬという事を最後まで受け止められず、壊れてしまったお父さんの姿を目に焼き付けている。毎日精神が錯乱して暴言を吐かれたり、暴れられたり、脳が病気で圧迫されて最後になると、娘はいないと存在自体が忘れ去られて、若い時の父親の愛人だと勘違いされた。

「お父さんは本当にお母さんが邪魔なんだね。だったら別れてしまえばいいのに。だけどお父さん、そんな弱いことが出来ないんだって、意味が分からないよね」
お姉ちゃんは目を虚ろにしながら呟いていた。
私は学校の関係で家を離れていて、お父さんの本当の病気の末期まで帰れなかった。
確かに学校は大事だけど、何とか帰られないかと思って学校にかけあってみたら「帰らないほうがいい」というお母さんと「父さんに会えば君は傷つくよ。それは嫌」とお姉ちゃんに強く言われた。その語気の強さに従うしかなかった。
危篤状態になって実家に戻ってからお母さんから聞いた話は、のどに石を詰め込んだのかと思うほどに息苦しくて痛い話ばかりだった。実際に私も忘れ去られていた。ショックすぎてお父さんのいる病室を出て階段をしばらく下りてたらやっと泣くという感情（反応）とつながった。笑えも泣けもしない話だった。感情が壊れてしまう話だった。
結局錯乱して壊れてお父さんはきれいにまともに死ねなかった。最後に当人の本来の意思が残っていたのかもあやしい。暴れて体が弱まって意識を混濁しながら暴れて、言葉は不明瞭で、その時点でお父さんはもう違う場所に行ってしまったと思った。お父さんは生きながら死んでしまった。化け物になって死んでしまった。
長くかかった病気だったのに、きちんとお別れできなかった。

お父さんが死んでからしばらくしてお姉ちゃんは言っていた。
「私が死んであえたら、私の死に様はお父さんより良かったよと自慢して皮肉の一つでも言いたいな。お父さん馬鹿だなぁってちょっと説教してくるよ」
「説教なんて聞くかなぁ。すっごいジコ中だし、耳の痛い話なんて聞かないんじゃ」
お姉ちゃんは笑った。

「そうだね。だけどそんな人でも大事な人だよ。お父さんがいなきゃ私はいない。馬鹿だと分かっているけど。そういやさお父さんの手、本当分厚かったな。指が短くて、髪をくしゃくしゃになるまで混ぜて。はは……本当よくやってくれたよ」
「お姉ちゃんは、昔に戻りたいの？」
お姉ちゃんは首をゆっくりと横に振った。
「そんな事ないよ。どうしたって……戻れないじゃない」
ひまわりみたいな笑顔をお姉ちゃんは私に向けた。頬が引きつっていた。
苦しくて顔をしかめているようにも見えた。

ろくでもない死に方で色々とお父さんが家族にしてきた酷い事がお姉ちゃんにとってゼロに等しい事になっている。激しい後悔が事実を濁して見えなくしている。いやもしかしたら、ろくでもない死に方をしたろくでもない父親と血をつながっている事にすら恐怖をもっているのかもしれない。それでお父さんをきれいにして、何とか自分を保っているのかもしれない。お姉ちゃんプライド地味に高いし。
ただ事実として言っても良いくらいなことは、お姉ちゃんはもういない人を思慕し続け、いつまでも心に喪服を着続けて後悔し続けている。本気で幸せに思うのは過去のことばかり、過去に手を伸ばして心を慰めてばかり。何かおかしい。
これから絶対楽しいことがあるよと思う。
いなくなった人なんか忘れしまうくらい素敵な人がいるよと思う。
生きることはもっと楽しくてもいいはずだ。じゃなきゃどうして私たちは生き残ってるの？　生活が苦しさが増して、お父さんが死ぬなんて世界が欠ける感覚に襲われるほどの目にあって、存在自体もお父さんの記憶から勝手に消されて。これから先努力して少しでも楽しくなきゃ幸せじゃなきゃ、何か納得できない。いつまでも過去という雨の中で濡れているのは嫌だ……！

「私たちは今から未来を生きている。それしかできないんだよね」
お姉ちゃんはお父さんの葬式でそう言っていた。お父さんが死んでほっと安心した自分に恥じて泣きながら。お父さんの死を悲しめない自分に泣きながら。
その言葉はお姉ちゃんにとって自分を言い含めるだけの軽い言葉だとしても、私は深く心に刻み込んでいる。
未来に進むしかないなら前を向いて歩こう、お姉ちゃん。
散った桜だってまた花を咲かすじゃん。
少しずつでもいいから、私がお姉ちゃんの手を取るから、次にいこう。
照れくさくて言葉に出来ないけど、私はそう思っているよ。

私は言った。
「お姉ちゃん、来年も桜見ようね」
目を丸くしながらお姉ちゃんは私を見た。
「え、いいの？」
「うん、いいよ」
何故か黙りこむお姉ちゃん。
私は軽く息をついた。
「迷惑じゃないよ」
お姉ちゃんは子供のように目を大きく輝かせて、それから恥ずかしそうににこっと笑った。
「ありがとう。歩美」
あまりに素直な口調で言うお姉ちゃんの姿に何故かこっちも恥ずかしくなる。
お姉ちゃんから視線をそらして私は窓の外を見た。冷たい雨をふらした重い灰色の雲の隙間から青色がのぞいていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8964k/

一歩の前の物語

2011年10月9日21時55分発行